

日韓併合百年

神谷 忠孝

抄録：日韓併合百年にあたる 2010 年、日本、韓国の双方から併合条約が当初から不当で無効だったという意見が噴出してきた。これらの文献を読んで整理し、問題点を確認しようとしたのが本稿である。司馬遼太郎の「坂の上の雲」が放映されてブームとなり、司馬史観が一人歩きすることへの危惧も表明されている。こうした国内の動向や韓国の反応にも目配りした上、司馬遼太郎の日清戦争観が林房雄の「大東亜戦争肯定論」の影響を受けたのではないかという仮説を提示した。

序文

2010 年は「韓国併合」または「日韓併合」から百年目にあたる。これにともなう学会誌、商業誌などが特集を組んだ。また、日本と韓国でシンポジウムが開催された成果が出始めている。歴史学者、思想家などの著作も次々に刊行されている。それらの中から新しい提言や新資料による再検討などを整理し、一区切りとして記録しておくことに意義があると考えます。

おりしも、NHK が司馬遼太郎の「坂の上の雲」をスペシャルドラマとして作成し、人気俳優の起用が功を奏して評判になっている。NHK は企画の意図として、〈『坂の上の雲』は、国民ひとりひとりが少年のような希望をもって国の近代化に取り組み、そして存亡をかけて日露戦争を戦った「少年の国・明治」の物語です。そこには、今の日本と同じように新たな価値観の創造に苦悩・奮闘した明治という時代の精神が生き生きと描かれています。この作品に込められたメッセージは、日本がこれから向かうべき道を考える上で大きなヒントを与えてくれるに違いありません。〉と説明している。

司馬遼太郎は愛国者、保守的思考の人々に人気がある作家であるが、「坂の上の雲」については『サンケイ新聞』連載（1968・4・22～1972・8・4）当初から批判的に読む人が発言している。伊藤博文が戦争を回避しようとしていたとか、朝鮮を他国からの侵略から守ろうとして日清戦争を起こしたという独断的な見解に学者たちが反発したのである。司馬遼太郎は学者たちの反発を想定していたことは作中で進歩派学者への批判の言辞を書いていることからわかる。

個人的見解としては、司馬遼太郎の発想がどこからでてきたかについて、従来の研究がふれていない、林房雄の『大東亜戦争肯定論』に言及するつもりである。また、日本ローマン派を研究している立場から、日本で生き続けている日本ローマン派との関係についても私見を述べるつもりである。

I 問題の整理

北海道新聞は 2010 年 5 月 11 日の朝刊で、「日韓併合『当初から無効』」という見出しで次のような記事を載せた。

〈1910年の日韓併合から8月で100年を迎えるのを前に、日韓の研究者や文化人ら約100人が10日、東京とソウルで、併合条約が当初から不当で無効なものだと日本政府が認めることを求める「共同声明」を発表した。

会見した発起人の和田春樹・東大名誉教授は、総理大臣談話などの形で実現するよう政府に働き掛けると話した。

日韓は国交を樹立した65年基本条約で、併合条約は「もはや無効」と明記。韓国が併合条約は締結時から無効だと主張するのに対し、日本政府は少なくとも植民地支配中は有効だったと解釈する立場を取ってきた。

「共同声明」では①併合は大韓帝国の抗議を軍事力で押しつぶしたもの②韓国側が国権譲与を申し出たとの併合条約の内容も虚偽と指摘。その上で、日本政府も併合条約について韓国と同じ解釈を取るよう求めた。

声明には2005年に報告書を出した第1期日韓歴史共同研究委員会の日本側座長を務めた三谷太郎・東大名誉教授も名を連ねた。韓国側では詩人の高銀氏や金芝河氏のほか、保革両派のメディア幹部を含む幅広い層が賛同した。〉

この記事に関連させて分かりやすく解説したのは北大准教授・権錫永で、『『韓国併合』百年』（『北海道新聞夕刊』2010・9・9）に次のように書いている。

〈「韓国併合」百年という節目の年にあたり、韓国併合条約をめぐる解釈の重大さを痛感した。

この条約の見方は、「正当・合法」「不当・合法」「不当・不法」の三通りがある。日本の学界では二つ目の見方が主流だ。つまり、韓国併合条約は不当だが、当時の国際法的には合法だとする見方だ。一方、韓国ではもっぱら三つ目の不当・不法説を採る。あの条約は不当であるだけでなく、当時の国際法に照らしても不法だとするもので、条約およびそれに基づく朝鮮支配は「当初から無効」ということになる。

今年の五月、日韓の研究者や文化人ら約二百名が、併合条約が当初から不当で無効なものだと日本政府が認めることを求める「共同声明」を発表したが、その時にも言葉選びの問題で大きく紛糾し、日本側に多数の辞退者が出たと言われる。韓国側の不当・不法という主張に対して、日本側に反対者が多く、結局「不義不正」という曖昧な表現が採択された。

この声明は条約が無効だったとことを盛り込んでいるが、その要件であるはずの「不法」という語を欠いたままである。このことは、日韓の関係が大きく進展したことを示していると同時に、ほぐしきれない両国関係の現住所を示しているように思われる。

その意味で、八月末に新たに発表された「植民地支配の清算と平和実現のための韓日市民共同宣言」に、条約は「不法」であり、したがって「無効」である、と明示されたのは一つの事件と言っていい。両国の市民団体は力を合わせて、日韓の平和で友好的な関係の構築に向かって新たな一歩を踏み出そうと懸命である。〉

成田龍一は『『帝国責任』ということ』（『世界』2010・1）の中で、日本の学者の多くは「不当・合法」の立場をとっているとして、山辺健太郎『日韓併合小史』（岩波書店、1966）、森山茂樹『日韓併合』

(吉川弘文館、1992)、海野福寿『韓国併合』(岩波書店、1995)などを紹介している。海野福寿が「不当ではあるが、旧条約は法的には有効に締結され、日本は韓国を併合し植民地とした」と述べていることが学界の主流だったようだ。成田龍一はまた、日韓第一次会議(1952)のとき、日本が結んだ「保護」や「併合」に関わる条約の「無効」を確認するように韓国から要求されたことも書いている。

それから約半世紀後、韓国の歴史家・李泰鎮が法的観点から「国権奪取過程」に至る条約を検討し、「韓国併合は成立していない」上・下(『世界』1998・7-8)を発表した。日本と韓国のあいだで結ばれた条約は「強制」であって、「合意」を欠くばかりでなく「手続き」と「形式」に問題を有し、「韓国併合」は法的に成立しないと主張した。このような経緯を概観すると、「韓日市民共同宣言」が条約は「不法」であり、したがって「無効」と明示したことは画期的だったことがわかる。

II 辞・事典の記述

- 1 『日本史辞典』(東京創元社、1990・6初版)には次のように書かれている。

〈韓国併合 1910年(明治43)8月2日、日本が「日韓併合ニ関スル条約」の調印を韓国に強要し、朝鮮を日本領土としたこと。朝鮮併合ともいう。江華島事件と日朝修好条規による開国の強要以降、明治政府は朝鮮侵略を進め、1880年代には甲申政変などを機に歩を進め、90年代には日清戦争によって清国の勢力を朝鮮から一掃した。ついで日露戦争を引き起すと日本の朝鮮併合政策は一段と具体化し、急速に進められた。開戦直後、日韓議定書を推しつけ、ついで第1次日韓協約により財政・外交顧問を韓国政府に送りこみ、同時に日露戦争に派兵した部隊の一部を大本营直属の駐留軍に編成し、その下で軍律による支配を朝鮮全土に拡大した。(中略)1905年11月17日第2次日韓協約によって韓国の外交権をうばい日本の保護国とし、韓国統監府を設置、内政にも露骨に干渉した。初代統監となった伊藤博文は07年傀儡的な李完用内閣を成立させ、ハーグ密使事件を口実に国王を退位させ、第3次日韓協約を強要して名実ともに内政権をも握り、多数の日本人顧問を送りこみ併合にいたる諸政策を遂行した。この年には朝鮮を完全に併合する方針を閣議決定した。(後略) 筆者・井口和紀)

- 2 『朝鮮を知る事典』(平凡社、2000・11、新訂増補版第1刷)の一部を引用する。

〈(前略)明治政府が最初にもくろんだことは、朝鮮が独立国として強力になることを阻むことであった。朝鮮の富国強兵化をめざす開化派の計画が失敗したこと(1884年、甲申政変)は、日本政府に展望を与えるものであった。しかし、政変と前後して、清国が朝鮮に対する宗主権を強化しはじめ、日本と対立するようになった。この清の影響力を排除するために仕組まれたのが日清戦争(1894-95)である。あらかじめ周到な準備をした日本がこれに大勝したが、それでも日本の朝鮮支配は実現しなかった。朝鮮政府や民衆の根強い抵抗や、ドイツ、フランス、ロシアの三国干渉もあって、日本の行動は思うにまかせなかった。1896年2月には、朝鮮国王をロシア公使館に監禁するクーデタが起こり、朝鮮政府はロシアとの提携をはかるようになった。こうして、日本が朝鮮支配を追及するかぎり、日露戦争は避けられないものとなった。

1904年日露開戦にふみきると、日本政府はさっそく朝鮮植民地化の基礎固めに着手した。韓国政府に戦争協力を強要したうえで、政府要所へ日本人顧問を送りこみ露骨な内政干渉を行った(2月に日韓議定書、8月に第1次日韓協約)。そして05年春、日露戦争に勝利する見通しがつくと、

韓国を日本の〈保護国〉とすることを決定し、同年11月、日韓保護条約（第2次日韓条約）に強制的に調印させた。これから後の5年間は、保護国統治機関である統監府の支配の下で朝鮮がしだいに植民地と化していった時期であった。朝鮮国王高宗は07年の万国平和会議に密使を派遣して、日本の支配の不当性を訴えようとしたが聞き入れられなかった（ハーグ密使事件）。それどころか、統監伊藤博文は国王を責めて退位させ、韓国軍を解散させた（第3次日韓協約）。09年10月、反日義兵闘争に対する大規模な〈討伐作戦〉が展開されている最中に、伊藤博文が安重根によってハルピン駅頭で射殺された。日本政府は軍隊（2個師団）と憲兵隊を常駐させ、ついに警察権をも韓国政府から奪って、10年8月、併合を断行した。（後略）筆者・馬淵貞利

Ⅲ 司馬遼太郎の「朝鮮」観

「坂の上の雲」の「日清戦争」に次のようにある。

そろそろ、戦争の原因にふれねばならない。

原因は、朝鮮にある。

といっても、韓国や韓国人に罪があるのではなく、罪があるとすれば、朝鮮半島という地理的存在にある。

ゆらい、半島国家というものは維持がむずかしい。この点、ヨーロッパにおけるバルカン半島やアジアにおけるベトナム（安南）などがそれを証明しており、たまたまこの日清戦争の直前、ベトナムにおいてよく似た問題がおこっている。清国がベトナムの宗主権を主張し、これを植民地にしようとしたフランスと紛争し、その結果、清仏戦争がおこり、フランス海軍は清国福建艦隊を全滅させ、さらに陸戦においても清国は連戦連敗した。明治十七年のことである。

朝鮮半島のばあいは、ベトナムよりも複雑である。

清国が宗主権を主張していることは、ベトナムとかわりがないが、これに対しあらたに保護権を主張しているのはロシアと日本であった。

ロシア帝国はすでにシベリアをその手におさめ、沿海州、満州をその制圧下におこうとしており、その余勢を駆ってすでに朝鮮にまでおよぼうといういきおいを示している。

日本は、より切実であった。

切実というのは、朝鮮への想いである。朝鮮を領有しようということより、朝鮮を他の強国にとられた場合、日本の防衛は成立しないということであった。

日本は、その過剰ともいべき被害者意識から明治維新をおこした。統一国家をつくりいちはやく近代化することによって列強のアジア侵略から自国をまもろうとした。その強烈な被害者意識は当然ながら帝国主義の裏がえしであるにしても、ともかくも、この戦争は清国や朝鮮を領有しようとしておこしたのではなく、多分に受け身であった。「朝鮮の自主性をみとめ、これを完全独立国にせよ」

というのが、日本の清国そのほか関係諸国に対するいいぶんであり、これを多年、ひとつ念仏のようにいいつづけてきた。日本は朝鮮半島が他の大国の属領になってしまうことをおそれた。そうなれば、玄界灘をへだてるだけで日本は他の帝国主義勢力と隣接せざるをえなくなる。

このため日本は全権伊藤博文を天津におくって清国の李鴻章と談判せしめ、いわゆる天津条約をむすんだ。

その要旨は、

「もし、朝鮮国内に内乱や重大な変事があったらばあい」

という想定のもとに、

「そのばあい、両国（清国と日本）もしくはそのどちらかが派兵するという必要がおこったとき、たがいに公文を往復しあって十分に了解をとげること、乱がおさまったときにはただちに撤兵すること」

ということであった。この条約によって日本は朝鮮の独立を保持しようとした。

（文春文庫『坂の上の雲』（二）48－50頁）

この部分には司馬遼太郎の日清戦争に対する見解がでていいる。朝鮮の自主性を認め、領有する気はなかったというのである。ではなぜ戦争になったのかについては、引用文のあとで書いている。明治27年2月、甲午農民戦争が起り鎮圧しようとした政府軍は敗北した。清国政府は韓国駐在の清国代表・袁世凱に救援を要請した。日本の代理公使・杉村はこの動きを察知して、本国にいつでも出兵できるように申し送った。外務大臣・陸奥宗光は機敏に動いて閣議決定した。このときの首相伊藤博文は清国との戦争を避けるようと陸相・大山巖に言い含めたと作者は書いている。このあとの動きは次のように書かれている。

兵は、神速にうごいた。

閣議決定後わずか十日の六月十二日、混成旅団の先発部隊ははやくも仁川に上陸した。

清国はおどろき、韓国はろうばいした。

「日本帝国の公館と居留民を保護するというには、上陸旅団の人数が多すぎる」

と、清国はさかんに抗議した。

このとき漢城には公使として大鳥圭介が駐在していた。大鳥は旧幕臣であり、かつては薩長に抗して関東に転戦し、最後は箱館の五稜郭にこもったという経歴をもっている。智謀の士ではなかったが、一種の蛮勇があった。外相の陸奥はこの部下の蛮勇をつかい、一大鳥をして一雨ふらせる。

とおもい、そういう内訓をあたえた。

大鳥は元来がそれが生地であったが、一個旅団の応援をえていよいよ韓国に対し強引な外交をやった。「日本の大使は銃剣の威をかりて強盗のようなことをする」と漢城の列国外交団はことごとく大鳥をきらい、この悪評が東京にまできこえた。

大鳥は、韓国朝廷の臆病につけ入ってついにその最高顧問格になり、自分の事務所を宮殿にもちこんだ。

韓国に対する大鳥の要求はただふたつである。「清国への従属関係を絶つこと。さらには日本軍の力によって清国軍を駆逐してもらいたいという要請を日本に出すこと」であった。

が、韓国側は清国が日本よりはるかに強いと信じているため、この要求を容れることを当然ながらためらった。

しかし七月二十五日、ついに韓国はこの要求に屈し、大島に対し清国兵の駆逐を要請する文書を出した。

大島はすでに派遣旅団長の大島義昌と気脈を通じている。公文書が出るや、大島旅団はときをうつさず牙山に布陣中の清国軍にむかって戦闘行軍を開始した。

（『坂の上の雲』(二) 62 - 63 頁）

開戦の端緒をこのように書いている。陸奥宗光が大島圭介を使って強引に要請文書を韓国朝廷に出させたという解釈である。伊藤博文は消極的であったと書いている。司馬遼太郎の「日清戦争」観が顕著にでてくるのは次のような箇所である。

日清戦争とは、なにか。

「日清戦争は、天皇制日本の帝国主義による最初の植民地獲得戦争である」

という定義が、第二次世界大戦のあと、この国のいわゆる進歩的学者たちのあいだで相当の市民権をもって通用した。あるいは、

「朝鮮と中国に対し、長期に準備された天皇制国家の侵略政策の結末である」

ともいわれる。というような定義があるかとおもえば、積極的に日本の立場をみとめようとする意見もある。

「清国は朝鮮を多年、属国視していた。さらに北方のロシアは、朝鮮に対し、野心を示しつつあった。日本はこれに対し、自国の安全という立場から朝鮮の中立を保ち、中立を保つために朝鮮における日清の均衡をはかろうとした。が、清国は暴慢であくまでも朝鮮に対するおのれの宗主権を固執しようとしたため、日本は武力に訴えてそれをみごとに排除した」(中略)

日清戦争とはなにか。

その定義づけを、この物語においてはそれをせねばならぬ必要が、わずかしかない。

そのわずかな必要のために言うとすれば、善でも悪でもなく、人類の歴史のなかにおける日本という国家の成長の度あいの問題としてこのことを考えてゆかねばならない。

ときに、日本は十九世紀にある。

列強はたがいに国家的利己心のみでうごき世界史はいわゆる帝国主義のエネルギーでうごいている。

日本という国は、そういう列強をモデルにして、この時点から二十数年前に国家として誕生した。

（『坂の上の雲』(二) 27 - 29 頁）

ここで数行のべねばならないが、朝鮮は日本の植民地ではない。

しかし軍事的には、大陸からうける日本列島への圧力を緩衝するための安全用のクッションということになる。こういう位置づけのされ方は、朝鮮半島にすむ韓人にとってはおよそ気に入らないことであろう。しかし国家というのは基本的に地理によって制約される。地理的制約が国家の性格の基本の部分をつくり、さらには対外国の姿勢の基本部分をつくり、そしてそれらはきわめて厄介なことに、その時代々々の国家がもつ意志以前のことに属する。

日本は、朝鮮半島を防衛上のクッションとして考えているだけでなく、李王朝の朝鮮国を、でき

れば市場にしたいとおもっていた。

他の列強が、中国をそれにしたように、日本は朝鮮をそのようにしようとした。笑止なことに、維新後三十余年ではまだまだ工業力は幼稚の段階であり、売りつけるべき商品もないにひとしいというのに、やりかただけはヨーロッパのまねを、つまり、手習いを朝鮮においてしようとした。そのまねをしてゆけばやがては強国になるだろうと考えていた。自然、十九世紀末、二十世紀初頭の文明段階のなかでは、朝鮮は日本の生命線ということになるのである。

要するに、日露戦争の原因は、満州と朝鮮である。満州をとったロシアが、やがて朝鮮をとる。これは、きわめて明白である。日露戦争にもし日本が負けていれば、朝鮮はロシアの所有になっていたことは、うたがうべくもない。
(『坂の上の雲』(三) 67 - 8 頁)

司馬遼太郎の『坂の上の雲』における朝鮮観に関して、影響を与えたと思われる先行文献を探ると林房雄の『続・大東亜戦争肯定論』(番町書房、1965・6)が挙げられよう。「坂の上の雲」連載の3年前に出版されている。第十章「朝鮮併合問題」で林房雄は、戦後に書かれた日本歴史の本がほとんどマルクス主義の影響を受けた進歩的知識人によって書かれていることを指摘し、次のような自説を述べている。

私は朝鮮併合を弁護する気持はない。その必要も認めない。朝鮮併合が日本の利益のために行われ、それが朝鮮民族に大きな被害を与えたことは誰も否定できない。ただ私は朝鮮併合もまた「日本の反撃」としての「東亜百年戦争」の一環であったことを、くりかえし強調する。

日本は朝鮮を併合したが、大東亜戦争には敗北した。敗北者を鞭うつことほど容易なことではない。朝鮮に被害を与えた日本人を祖先に持ちながら、学者顔の進歩人諸君は何の特権によって日本を鞭うつのか。それによって、彼が加害者とは無縁の「階級」に属することを証明するつもりなら、これほど卑劣な手品はない。

すべて戦争は他国民だけでなく、自国民に対しても多量の被害を与える。学者顔の偽善者諸氏は、おそらく戦争の被害をうけた日本の「人民」の名において、「正義と人道の鞭」を日本支配階級の資本主義と帝国主義に対してふるっているつもりであろうが、そんな正義人道面は朝鮮民族に対しては通用しない。

民族の敵は民族であって「階級」ではない。

このあと林房雄は金三奎(ソウル日報主筆)の『朝鮮現代史』から引用し、〈日本による「朝鮮の近代化」は、要するに、日本人が住みよく、搾取しやすくするための「近代化」であって、朝鮮人のための「近代化」ではなかった。……世に植民地主義ほど非情なものはない。非情な支配に対しては、非情な抵抗があるのみであった。〉という部分をとりあげ、〈ただ、私は金氏の怒りをおかして、敢て言おう。それがアジアの歴史であった。日本の歴史であると同時に朝鮮の歴史であった。歴史はさかのぼることも、くりかえすこともできない。陳謝や懺悔によってつぐなうことのできるものではない。〉と書いている。

朝鮮と日本がアジアで生き残るための止むを得ない併合であったという観点は司馬遼太郎と同じである。違うところは、司馬が、日清戦争を朝鮮の独立を守るためであって領有しようという意図はな

かったと日本を擁護する考えを持つものに対して、林房雄は朝鮮側の歴史書に目配りしている点で客観的である。

IV 司馬遼太郎言及した文献

① 旗田巍『朝鮮と日本人』（劉草書房、1983・11）

旗田巍は1908年朝鮮生まれ。東大文学部を卒業し、この本を出版したころは東京都立大学名誉教授。著書に『朝鮮史』（岩波全書）、『元寇』（中公新書）がある。この本の「司馬遼太郎氏の朝鮮観」で、司馬の『街道をゆく一韓のくに紀行』（朝日新聞社文庫、1978）について書いている。司馬が韓国の貧しい農村ばかりを歩いて、都市の発展的側面を無視し否定的側面だけを取りあげていることに不安を感じると述べている。1906年10月に韓国を訪れた新渡戸稲造が帰国後に書いた「亡国」「枯死国朝鮮」（全集5）で朝鮮の停滞を強調したことを何の疑いもなく踏襲していることへの危惧である。

② 備仲臣道『司馬遼太郎と朝鮮』（批評社、2007・10）

備仲臣道（びんなか・しげみち）は1941年、朝鮮忠清南道大田生まれ。山梨県立甲府第一高校卒。山梨時事新聞記者、同労働組合書記長。月刊「新山梨」編集発行人。1998年から2007年まで「高麗美術館館報」に高麗・李朝美術にかんするエッセーを連載。

「はじめに」には父が5歳のとき血のつながりも無い日本人に拾われて朝鮮で育ち、大阪から流れてきた母と結婚。戦争中は「中鮮日報」という日本語新聞の記者となり朝鮮民衆の抑圧者となったと書いている。敗戦当時4歳であった筆者は朝鮮の記憶はないものの抑圧者の子であった自分も同罪だという観点から朝鮮研究に入ったようである。「坂の上の雲」を批判的に読み、結論として、「司馬の思想というものは、「日本の優位」という観念に囚われて、排外主義的で、差別的で、尊大であるに過ぎない。」と述べている。

③ 谷沢永一『司馬遼太郎「坂の上の雲」を読む』（幻冬舎、2009・4 初版）

作者の意図を読解する解説書。「坂の上の雲」は日本礼賛ではなく日本批判の本であると説く。日露戦争は日本が勝ったのではなくロシアが負けてくれた戦争だった、日露戦争はイギリスが日本を利用した戦争だった、戦争のあやうい勝利がその後の日本を誤らせた、などの視点に作者の意図があることを指摘している。また、乃木希典を批判的に描いたことに注目し、乃木の「軍神化」が日本陸軍の病の象徴であることを主張したからだったと述べている。

④ 中塚明『司馬遼太郎の歴史観』（高文研、2009・8）

中塚明は1929年大阪生まれ。1963年より奈良女子大に勤務、現在名誉教授。著書は『日清戦争の研究』（青木書店）、『近代日本と朝鮮』（三省堂）、『近代日本の朝鮮認識』（研文出版）、『これだけは知っておきたい日本と韓国・朝鮮の歴史』（高文研）など。

「坂の上の雲」を対象に司馬遼太郎の朝鮮観を「朝鮮の地理的位置論」「朝鮮無能力論」「帝国主義時代の宿命論」などの三つの論点から批判的に分析している。そして、司馬が書かなかった三つのキイとして、「朝鮮王宮占領」「朝鮮農民軍の抗日闘争と日本軍の皆殺し作戦」「朝鮮王妃を殺害した事件」を挙げ史実を明らかにしている。

⑤ 和田春樹『日露戦争』【上】（岩波書店 2009・12）【下】（2010・2）

和田春樹は1938年大阪生まれ。東京大学名誉教授。和田は「坂の上の雲」の中の、「日露戦争と

というのは、世界史的な帝国主義時代の一現象であることはまちがいない。が、その現象のなかで、日本側の立場は、追いつめられた者が、生きる力のぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であったこともまぎれもない。〉を引用し、〈司馬のこのようなロシア観は、後世の一九六〇年代からみた見方であるだけでなく、実は日露戦争を戦ったその時代の日本人のロシア観でもあった。そして日露戦争観全体も、日露戦争にかんする日本人のこれまでの著作の多くに共通してみられる見解なのである。〉と書いている。司馬の日露戦争観を透徹したものと評価しながら、「坂の上の雲」に朝鮮がほとんど書かれていないことを批判している。

⑥ 中塚明・安川寿之輔・醍醐聡『「坂の上の雲」の歴史認識を問う』（高文研、2010・6）

安川寿之輔は1935年兵庫県生まれ。名古屋大学名誉教授。著書は『日本の近代化と戦争責任』（明石書店）、『福沢諭吉のアジア認識』『福沢諭吉と丸山真男』『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』（以上、高文研）など。醍醐聡は1946年兵庫県生まれ。元東大大学院経済学研究科教授。NHKを監視・激励する視聴者コミュニティ共同代表。I～VIは中塚明が執筆し③の著書を分かりやすくしている。その上、北海道大学で見つかった頭蓋骨の中に東学党の指導者のものがあつたこと、それに関連して北大大学院で博士課程を修了した韓国円光大学の朴孟洙が監修した『東学農民革命100年』（つぶて書房、2007）に就いて紹介している。VIIは安川が執筆。「秋山好古の尊敬する福沢諭吉は、はたして『一身独立』を説いたのか」で安川は、「坂の上の雲」で秋山好古が弟の真之に諭吉の「学問のすすめ」にでてくる「一身独立して一国独立」という言葉に感動した箇所は司馬の誤謬であることを説明している。福沢諭吉から「明るい明治」を読み取った司馬と、諭吉を「健全なナショナリズム」の先駆者と評価する丸山真男は同類であることを論じている。醍醐は、生前の司馬が原作の映像化を強く拒んでいたのに、NHKはなぜ企画化にふみきったのかと問いかけている。

⑦ 松本健一『三島由紀夫と司馬遼太郎』（新潮新書、2010・10）

この本は両者の天皇観を比較し、三島には天皇への強いこだわりがあるのに対し、司馬においては希薄であることを論じている。

⑧ 高井弘之『誤謬だらけの「坂の上の雲」』（合同出版、2010・12）

高井弘之は1955年生まれ。えひめ教科書裁判を支える会スタッフ。松山市が1999年から「坂の上の雲」まちづくりを進め「坂の上の雲ミュージアム」を建設し、NHKドラマ放送開始前には教育委員会名で児童生徒、保護者に家族そろって視聴するように文書を配布したことに抗議しNHKに公開質問状を出したグループ。中村時広市長は愛媛県知事選出馬のため2010年11月、辞任。世間ではこの作品を歴史小説であつて歴史書ではないと放任する風潮もあるが、作者はかなりの資料を参照しており、そこに書かれていることは、書き手にとつても読み手にとつても、歴史的事実として存在したという了解の上に成り立っているので、史実とフィクションを区別して読むことの重要性を主張した本である。公開質問状では4点について問いかけている。(1)日清戦争は、司馬の言うように、「清国や朝鮮を領有しようとしておこしたのではなく、多分に受け身であつた」戦争であつたか？ (2)日露戦争は、司馬の言うように、「祖国防衛戦争」であつたか？ (3)「北清事変」（義和団鎮圧戦争）で「日本軍は掠奪しなかつた」というのはほんとうか？ (4)日本は、司馬が言うように、「戦時国際法の忠実な遵法者」であつたか？

V 日韓併合に関する近年の文献

- ① 海野福寿『韓国併合史の研究』（岩波書店、2000・11）
- ② 海野福寿『伊藤博文と韓国併合』（青木書店、2004・6）
- ③ 加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社、2009・7）
- ④ 井上勝生「東学農民軍包囲殲滅作戦と日本政府・大本営―日清戦争から『韓国併合』一〇〇年を問う―」（『思想』2010・1）
- ⑤ 『世界』特集「韓国併合100年―現代への問い」2010・1
討論「朝鮮植民地支配とは何だったのか」和田春樹・姜尚中・藤原帰一
成田龍一 「帝国責任」ということ
- ⑥ 安田常雄・趙景達編『近代日本のなかの「韓国併合」』（東京堂書店、2010・3）
- ⑦ 「韓国併合」100年市民ネットワーク編『今、「韓国併合」を問う』（アジェンダ・プロジェクト、2010・3）
- ⑧ 金賛汀『韓国併合百年と「在日」』（新潮新書、2010・5）
- ⑨ 水間政憲『朝日新聞が報道した「日韓併合」の真実』（徳間書店、2010・7）
- ⑩ 片野次雄『日韓併合1920－2010』（彩流社、2010・8）
- ⑪ 片野次雄『李朝滅亡』（彩流社、2010・8）
- ⑫ 前田憲二・和田春樹・高秀美『韓国併合100年の現在』（東方出版、2010・11）

これらの文献で新しい資料を提示したのは④である。日清戦争開始後の10月27日、参謀次長・川上操六から仁川の兵站部に「東学党に対する処置は厳烈なるを要す、向後悉く殺戮すべし」という電報が打たれた。東学党の再蜂起が朝鮮半島の北西にも拡がり、日本軍が鎮圧するという事態になればロシアの抗議を受けるには明らかだから、西南に追いつめて殲滅せよという内容。この決定は広島に移動していた大本営の伊藤博文首相、有栖川宮参謀長、川上操六参謀次長ら政府・軍の最高指導者たち、そして陸奥宗光外相も参画のうえ立案・決定された。伊藤博文を「平和主義者」だとする説への反論資料である。②は伊藤博文が百年後、小村寿太郎、高宗、李完用、安重根、寺内正毅などと再会するかたちの架空対談という趣向で読ませる。

⑧は韓国併合前後、日本に留学していた学生たちの動向を当時の資料を用いて丹念に追跡している。日本でハンゲルの新聞や雑誌が印刷されていたことも記述されている。⑨の片野次雄は1935年東京生まれ。民族学的見地から僻村の取材を行うかたわら、李氏朝鮮を中心に歴史研究を続けている。著書に『戦乱三国の 코리아 史』『善隣友好の 코리아 史』（彩流社）、『日帝三十六年の顔』（韓国ソウル・宇石出版）などがある。安重根に就いて詳しく書いている。

VI 結び

日韓併合から百年になる2010年、韓国と日本の歴史学者が対等に協議して、併合を再検討したことは画期的であった。これからの日韓関係は2010年を契機としなければならない。本稿では司馬遼太郎の朝鮮観をとりあげたが、林房雄の『大東亜戦争肯定論』を再検討することの必要を感じた。アジア主義の総合的研究が今後の課題である。

The Centennial of the Japan-Korea Annexation Treaty

KAMIYA Tadataka

Abstract: "The Centennial of the Japan-Korea Annexation Treaty" the Japanese policy on Korea being thought of as a part of Japan, which was conducted in Korea[1910-1945], is treated in this thesis.